

マレーシアにおける国際理解教育・外国語教育の現状と 英語教育の在り方について

— 現地幼稚園（Hilltop Private School）と

現地小学校（Sekolah Kebangsaan Bandar Seri Alam 1）との交流を通して —

前ジョホール日本人学校 教諭

静岡県御殿場市立玉穂小学校 教諭 柴田 勝好

キーワード：小学校での英語教育，国際理解教育

1. はじめに

マレーシアは、マレー系・チャイニーズ系・インド系など、様々な国の文化や言語をあわせ持つ人々が集まった多民族国家である。日常生活において、基本的には英語は通用するが、英語を母国語としているわけではなく、すべての人が英語をコミュニケーションの手段として使用しているわけではない。マレーシア教育省は、国民の英語力の育成に向け、現地小学校において、英語科以外に、数学・理科についても英語で教えるという方針をとっていたが、様々な理由により、今後は母国語であるマレーシア語を重視し、母国語による授業を行うよう変更するとしている。しかし、日本同様、国際語として英語の重要性は十分認識おり、現地の英語教育の現状を理解することは、これからの日本の英語教育の在り方を考えるにあたり、とても参考になると考えた。そこで、現地の幼稚園、小学校を訪問し、現状を調査してみた。

2. 現地における英語教育の現状

(1) 現地幼稚園Hilltop Private School訪問を通して

①多民族幼児が通う現地幼稚園の言語教育の現状

Hilltop Private Schoolでは、マレー系・中国系・インド系のマレーシア人に加え、韓国、日本、オーストラリアなど、アジアや欧米から来た子どもたちを受け入れている。そうした環境の中では、当然、子どもたちは言語獲得において個人差があり、指導する側にとっては、大きな問題となってくることが予想される。英語を母国語としない子どもが、どのように外国語を獲得していくのか、取材してみた。

②子どもの実態に応じた自作テキストの使用（Readingを重視した指導）

園長が中心となり、きちんとした教育カリキュラムを編成し、それに基づいて、自作のテキストを作成していた。例えば、年齢の低いクラスでは、語いを増やすために同じ音で始まる単語のイラストを描いたテキストを使用したり、年齢が上がるに従って、単語が単文になったり連文になったりしていく。覚える単語は、意味もなく並んでいるのではなく、1つ1つをつなげていくと文になり、新しく覚えた単語を組み合わせてたり入れ替えたりして、生活に必要な会話が必然的に身についていくようになっていた。このように、単語の種類や内容が工夫された手作りのテキストを、段階的に使用しながら、Reading（文字を読むこと）を重視した指導を行っているということであった。

③目、耳、体全体を使った活動

子どもの年齢や実態に応じて、歌やダンス、ゲームを取り入れ、楽しみながら言語を獲得していけるような指導がなされていた。

（例）～数字をターゲットワードにした活動～

・「10回ジャンプしたら（肩をさわったら）座ろう。」といった動作を伴うゲームを行う。続けていくうちに、

声を出して1から10までの数を数えながらできるような子が増えていく。(決して、初めから全員できなくてもよいというスタンスで。)

- ・しばらくしてから、数字とアルファベットがかかれたカードを使用しながら、声に出した音と文字とを結びつけていく。
- ・文字が読めるようになってきたら、文字と関係する事柄を含めた質問をしたり、声に出した数字を書いてみたりする発展的な課題に取り組む。

～フォニックスを取り入れた活動～

- ・『F』の発音を練習する際、ただ、教師が見本をみせ、子どもが繰り返すのではなく、「さあ、風船をふくらませてみよう」という投げ掛けをして、楽しみながら学ぶ。
- ・正しい発音に慣れてきたら、同じ音が混じった言葉を集め語いを広げていく。(積み重ねていく)
- ・カードを使ったゲームやクイズを取り入れ、子どもたちの発音の良いところを誉めていく。

④選択授業の導入

多民族幼児が通っている現状から、母国語と外国語(英語)の両方を身につけたいという保護者からのニーズに合わせ、週に1度、選択による言語教育の授業が行われていた。そのため、指導する教師も複数いて、それぞれ子どもたちが希望する言語を指導できるようになっていた。

(2) 現地小学校 Sekolah Kebangsaan Bandar Seri Alam 1 訪問を通して

①小学校1年生英語科授業の様子

学級は習熟度別のクラス編成がなされ、英語科の専科の教員が指導に当たっていた。

～授業(『FOOD』の学習)の流れ～

1. 日付と曜日の確認

Tuesday, 12 August 2008

2. 学習課題の提示

①『FOOD』に関する単語練習

- ・質問形式で、児童に好きなものを尋ねる。

How do you like to eat? I like to eat to _____.

※補助発問をして、なぜ好きなか理由を聞き出すなど、話す活動を行う。

- ・フラッシュカード(8枚)を使って、食べ物英単語の読み方・スペルを確認する。

※発音があいまいなものについては、繰り返し、発音練習をしていく。

chocolate, popcorn, cookies, cake, sandwich, noodles, bread, rice

- ・黒板に貼ったカードの下に、指名された児童が、アルファベットで単語を書く。

②『FOOD』に関する文章を読む。

- ・用意された文章を、教師の範読の後に続いて読んでいく。
- ・文章をノートに書き写す。FOODに関する単語に下線を引く。

3. 好きなもの・嫌いなものの発表

- ・指名された児童が前に出て、自分の好きなもの・嫌いなものを発表する。

My name is _____. I like to eat to _____. I don't like to eat to _____.

Because _____.

- ・発表した児童の好きなもの・嫌いなものを質問する。

He likes to eat to _____. He doesn't like to eat to _____.

現地幼稚園の語学活動と比較してみると、まず、読む活動の時間が多く、単語のスペルを確認しながら、発音を練習していたこと（読む活動の重視）、また、学習した単語の横に絵を描き、単語の意味をイメージで覚えていたこと（体験の重視～体を動かしたり、実物を利用して学習すること～）は、似ている部分であると感じた。その一方で、小学校では、話すことと合わせて、書く活動にも多くの時間が当てられていた。内容についても、単に例文を学習するだけでなく、「なぜ、そう思うのか？」理由を問う投げ掛けもあり、段階に応じて、学習内容も難しくなっていた。

②小学校2年生英語科授業の様子

小学校1年生の英語の授業と比べると、絵を使った指導から、文字中心の指導へと移行しつつあった。また、家庭学習でも1～2枚のプリント学習を行い、授業と合わせて、読む・書く活動をバランスよく取り入れ、繰り返し練習を行っていた。

(例) 1. 袋に入ったアルファベットを並べ替え、食べ物の英単語を作る。

(tomato, egg, fish, prawn, chicken)

2. 英単語さがし

prsbreadcisebiscuitfotrhpabanatanu pizzaseorangesepdrcarrotssusandwichashotdog

上記のアルファベットの中から、食べ物に関する英単語を見つける。

(bread, biscuit, banana, pizza, orange, sandwich)

(3) 本校英会話授業について

①本校英会話授業の現状

在外教育施設として、保護者も英語教育に関心が高い。児童・生徒の英語力については、現地での生活期間がどれだけかによって、個人差がある。そのため本校では、『簡単な日常会話を英語で話すことができる』力を身につけることをねらいとして、カリキュラムを作成し、現地採用職員が中心となって指導にあたっている。クラスは習熟度別に2～3つに分かれ、フォニックスを取り入れた話す・聞く活動を中心に、テキストを使った読む・書く活動と合わせ、バランスよく授業がすすめられている。

②TTによる英会話授業参加

現地採用の英会話講師と学級担任との連携を深めるため、TTとして英会話授業に参加した。英会話授業に慣れていない児童への支援を主な役割として行ったが、授業内容やすすめ方について意見交換をしたり、互いに提案授業を公開したりして、英会話授業の在り方について模索した。自分が提案した授業を参観した現地英会話講師の感想には、子どもたちが英語を楽しんで、積極的に英語でコミュニケーションをとろうとしていたこと、授業者と子どもたちの間にきちんと学ぶためのルールがあり、それがとても重要であると感じたことなどが書かれていた。日常的に英語をコミュニケーションの手段として使わない日本の環境においては、普段の授業の中で、バランスよく話す・聞く・読む・書く活動を取り入れて、基礎的な英語の力を身につけ、意図的にそれを披露する（使う）簡単な発表の場を設定していくことが、英会話の力の向上につながるのではないかという感想をもった。



TTで行った英会話授業の様子

3. 国際理解教育との関連

(1) 異文化交流としての場～ Hilltop Private School カルチャーフェスティバルを通して～

多民族国家という特性を生かし、現地幼稚園では、マレーシア・中国・インド・日本など、様々な国から集まった園児の保護者に協力をお願いし、それぞれブースを設置して、伝統的な音楽や遊び・習慣などを紹介したり体験してもらったりしていた。この場では、当然、コミュニケーション手段として英語が使われ、楽しい雰囲気の中で、相互理解を深めていた。また、中国のライオンダンスやインドの伝統的な楽器（ヴィーナ・タブラ）を使った演奏を間近で見たり、直に触ったりしている子どもたちの目は、とても輝いていた。自国と違った雰囲気を味わうことで、異文化に対する関心が、自然と高まっていった。



カルチャーフェスティバルの様子

(2) 自国の文化を発信する場～本校国際交流活動を通して～

現地小学校との国際交流活動では、日本の文化を伝え交流を深める手段として、主に英語を活用した。自国の文化を伝えたいという思いが、英語を使って話してみようという意欲となり、普段、英会話の授業で学習している英語表現の活用につながっていった。子どもたちの大半は、英語を使って自分の思いが伝えられた喜びや満足感を味わい、次回は、もっと英語で話ができるよう英会話の学習を頑張ろうと意欲をもつ姿が見られた。一方、英語による語学力とともに、自国文化理解が不十分であると、伝えたいという表現意欲が高まらず、交流も深まらなくなってしまうという課題も挙げられた。

4. おわりに

今回、現地幼稚園・小学校などの訪問や本校英会話授業への参加を通して、これから、日本で英語をコミュニケーションの手段の1つとして活用できる子どもたちを育てていくためには、どのようなことが必要か考えてみた。

1つは、英語の『話す・聞く』力を身につけるためには、『読む・書く』といった活動を合わせて導入していく必要があるということである。文字（アルファベット）を目にしながらか授業をすることは、子どもたちが英語表現を理解する上で有効な1つの支援となり、会話を（発音する）ときや新しい表現を覚えるときにも役立っていると感じた。文字の導入で英語嫌いな子を増やしてしまうというマイナスイメージがあるのならば、それをなくしていく英語の授業作りについて、今後、さらに研修を深めていく必要がある。

2つめは、伝えたいこと（自分の思い・自国の文化など）を英語で話す発信（発表）の場を確保していくことである。子どもたちは、学習した英語表現を使って現地の人々と交流し、思いが伝わったという喜びや満足感を味わうことで、『もっと英語で話したい』という意欲を高めていた。そういった意味では、国際理解教育（交流活動）を計画的に取り入れたカリキュラムや授業作りをしていくことが、重要になってくると思われる。

在外教育施設と違い、日常的に英語を使う環境にない日本では、英語指導の支援や交流する相手探しなどが難しいと予想される。継続して英語を楽しく学習する環境を作っていくためには、地域の人材バンクを利用したり各種団体に協力をお願いしたりする上で、今まで以上に学校以外の関係機関と連携していく必要もあるであろう。また、実際に外国の人と交流したことがない子どもたちには、『外国の人と交流することの楽しさ』を伝えていくことも大切である。そうした体験をしてきた在外派遣教員の一人として、少しでも役に立てるよう、今後も研修していきたい。